CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

晩期フッサールにおける歴史

宮　坂　和　男

（受付　2003 年 5 月 12 日）

「今日『ヨーロッパ的な存在の危機』がよく口にされ，生の崩壊の無数の兆候のなかで記録されているが，それは暗い運命ではないし，動かしようのない不運ではない。それは，哲学的に発見されうるヨーロッパの歴史の目的論を背景として理解され，見通されるのである。……現在の『危機』という混乱状態を把握することができるためには，ヨーロッパという概念が，無限の理性目標の歴史的目的論として仕上げられなければならない。」（VI, 347 強調原文）[1)]

1.　フッサール現象学における歴史の問題

よく知られているように，後期のフッサールは〈歴史〉について非常に多くを語っている。フッサールがこのテーマを大々的に取り上げたのは，周知のように『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』と略記する）においてである。そこでは，とりわけ近代以降のヨーロッパの哲学史が検討されており，その文脈のなかで歴史が主題化されている。銘記しておかねばならないが，フッサールが歴史を論じるとき，考察の対象とされるのは，多くの場合ヨーロッパの哲学の歴史である。

『危機』論稿は，フッサールの他の著作と異なる独自の性格を有している。それは，ここでフッサールが〈歴史〉という新たな座標軸に即した現象学の正当化を試みている点にある。すなわちフッサールは，自らの超越論的現象学の出現が，ヨーロッパの哲学が行き着く必然的帰結にほかならないことを論じており，歴史的正当性の主張という新たな形態における現象学宣言を行っているのである。『危機』の副題にも示されているように，歴史の考察は新たな仕方での「現象学的哲学への導入」を意味していたのである。

『危機』では「完成態（Entelechie）」や「目的論（Teleologie）」といった言葉が散見される。これらの言葉はともに「目的（telos）」を内に含んでおり，ヨーロッパの哲学史が

1）Husserl, E., *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie*, Husserliana Bd. VI, S.347.　以下，フッサールの著作から引用する際には，原則として，本文中に括弧で引用箇所を示す。ローマ数字はフッセリアーナの巻数，アラビア数字は頁を表わす。

確固とした目標を目指していることを示唆しようとしている。ヨーロッパの哲学が目指してきたテロスは明らかである，とフッサールは言う。すなわち，それは「超越論哲学(Transzendentalphilosophie)」にほかならないという。とりわけデカルト以来の近代ヨーロッパ哲学は，これを目指す志向によって根底から突き動かされていったというのである。「超越論哲学」はもちろんカントによって創設されたものであるが，さらにそれを補完し十全な形に仕上げるものとして，自らの超越論的現象学が位置づけられる。超越論的現象学において，すべての事象を主観性との相関関係において捉える姿勢が確立したとき，近代以降のヨーロッパの哲学を動かしてきた課題意識が完全に現勢化する，とフッサールは考えているのである。ヨーロッパの哲学は，歴史の必然によって超越論的現象学へと目的論的に到達すると考えられているわけである。

さて，後期フッサールが歴史へ接近した事情は，このようなことですべて説明し尽くされるだろうか。現象学を正当化するためだけに歴史が持ち出されているのだとすれば，それは悪しき独断的形而上学的概念として忌避されなければならないであろう。だが，フッサールによる歴史の主題化は，単にそれだけのことを意味していたのであろうか。私見によれば，この問題については，現象学研究のこれまでの積み重ねにもかかわらず，いまだに十分な解明がなされていないように思われる。

周知のように，中期までのフッサールは歴史を断固として拒否する姿勢をとっていた。もちろんそれは理解しにくいことではない。諸学を究極的に基礎づけようとする企てが，あらゆる学問的認識を時代に相対的なものと見なす立場に与するわけはない。いかなる学問的見解もその時代の状況に制約されていて，時代の変遷とともに変化し動揺するという歴史主義的な見方を，『厳密な学としての哲学』（以下『厳密学』と略記する）のなかでフッサールは徹底的に批判している。そもそも，このような見方をとる立場は，自分自身の見解が一時的なものであることを認めざるをえず，それゆえ自分自身の正しさを主張することができないであろう。歴史主義は自分の主張を自分で支えることができないのである。

歴史のなかの一時代に位置づけられるような相対的な学説とは根本的に異なる，超時間的な妥当性を持つ認識こそを現象学は手にしようとする。それゆえそれは「厳密な学」を目指すのである。フッサールが特に不当と見なしたのは，歴史主義が，数学のような理念的学問までをも時代拘束的・歴史相対的なものと見なそうとすることであった。『厳密学』から引用しよう。

「数学理論上の真理に関わる知見を得るために，数学者が歴史に頼ることはよもやないであろう。数学上の表象や判断の歴史的発展を，真理の問題と関連づけることなどは，数学者には思いもよらぬことであろう。したがって歴史家が，与えられている哲学体系

の真理について，ましてそれ自体で妥当する哲学的学問一般の可能性について，決定を下すことなどどうしてできようか。」[2)]

さて，ともに現象学宣言の書でありながら，『厳密学』と『危機』とが鋭いコントラストを見せていることは明らかであろう。前者が徹底的な無歴史性を追求するのに対し，後者は哲学史に依拠した正当化を図っている。この対比は何に起因しているのであろうか。

フッサールが後期の思惟を形成するに当たって，そこに至る何らかの〈転回〉があったことは間違いない。だが私見によれば，それは研究者の間でも，何かしら経験的なもの・事実的なものへの回帰として曖昧に捉えられており，それを理解する明確な視点はいまだ共有されていないように思われる。

しかし，本稿の冒頭に挙げた引用部分を見返してみれば，この問題について考えるためには曖昧な理解では済ませられないと感じざるをえないであろう。この箇所はウィーン講演（1935年）の終盤部である。この講演は，ヨーロッパの歴史が必然的な発展の道筋を辿ることを，フッサールが声高に主張したものとして知られている。ここに見られる特異な感情の高ぶりは，ただならぬものを感じさせるであろう。

晩期のフッサールの〈歴史〉対する見方は，中期までのそれと大きく異なると言うだけでは済まない。晩期のフッサールにとって，〈歴史〉は紛れもなく最重要の課題の一つを表示しているのである。そして，そこには現象学の基礎的部分に属する決定的な問題が関与していたと見るのが至当であろう。

この問題を考える上できわめて有益な書物が近年（1993年）出版された。『危機』論稿の内容に関連する草稿を集めて編纂された『危機・補遺巻』（フッセリアーナ第29巻）[3)] である。とりわけこの書の最終章に収められた草稿を見ることによって，フッサールが〈歴史〉に託していた役割が，これまで考えられていたよりもさらに大きいものであったことが分かる。

ある程度結論を先取りして言っておけば，晩期のフッサールは学問一般の基礎づけの課題を，《歴史の目的論》の構造に全面的に託したいという誘惑に駆られた，と見ることができるのである。晩期のフッサールは，幾何学をはじめとする理念的学問の成立を，歴史の目的論に基づく必然的な道筋によって説明しようとしている。そしてさらには，超越論的現象学そのものをも《歴史の目的論》によって基礎づけようと意図していた。それは，『危機・補遺巻』に収められた草稿のなかで明らかになっている。そのためにフッサールは，それまで

2) Husserl, E., *Philosophie als strenge Wissenschaft* (Vittorio Klostermann), S. 52.
3) Husserl, E., *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie, Ergänzungsband, Texte aus dem Nachlaß* 1934–1937, hrsg. von R.S. Smid, Husserliana Bd. XXIX (1993).

に構想した現象学のプログラムを全面的に変更しようとする意向さえ持っていた節がある。このことが最も如実に見て取られるのは，現象学的還元の道として「歴史的な道」が構想されていた点においてである。

以下本稿では，フッサールにおいて〈歴史〉の問題が顕在化する脈絡を確認し，然る後に，それが超越論的現象学の構想に関わってくる次第を辿ってみよう。

2. 幾何学的理念性の歴史的生成

日常的経験のなかでわれわれが歴史に思いを馳せる場面から考察を再開することにしよう。われわれが歴史を意識するのはどのような時であろうか。

かつて堀田善衛はスペインを旅しながら，「〔スペインでは〕どこへ行っても，重層をなす『歴史』というものが，何の粉飾もなく，あたかも鉱脈を断層において見るように露出している」[4] と述べたことがある。堀田が歴史を感じているのは，遺跡を眼前にしてである。ローマ人が山深い場所に造った意味不明な石造の遺跡が，2000年の時を越えて，不思議なことに「今」目の前にある。そして堀田の意識において，この歴史の現出が，山の国スペインにあって，鉱脈が露出しているイメージと重なっているのである。

歴史を意識する際の感慨がこのようなものであるならば，われわれは思わぬところで同様の感慨をもつはずである。それは，われわれが数学的・幾何学的認識を獲得する時である。

「ピタゴラスの定理」もまた2000年以上前に発見された。そして今日幾何学の授業においてそれを学ぶ時，われわれは確かに過去の歴史的出来事を体験している。われわれは，ピタゴラスが証明した事柄を，不精密な定規と粗末な鉛筆によって，だがそれにもかかわらず，いささかの変更もなしに追認している。ここには様々な不思議がある。

数学的・幾何学的認識は，遺跡と違って古びたり色あせたりすることがない。それは感覚によって捉えられる時間空間的な存在者ではなく，「理念的（イデア的）」な存在者だからである。それゆえそれは，常識的な意味では歴史的に存在するものではない。だが，それにもかかわらず，われわれはそれを粗雑きわまりない作図によって再現し，しかも最初に発見された時と等しく認識する。したがってわれわれは，数学的・幾何学的事象を認識する時，いかなる遺跡を眼前にするときよりも歴史的な体験をしているのである。

数学的・幾何学的認識と歴史とのこの不思議な関わりに着目することは，後期のフッサールの思惟を統一的に捉えるための大きな手がかりを与えてくれる。たとえば後期の代表的著作である『形式論理学と超越論的論理学』（1929年）（以下『論理学』と略記）の序文を参照

4） 堀田善衛『スペイン断章（上）』（集英社文庫，1978年），8頁。

してみよう。フッサールはそこで，真の意味での学問は「プラトンによる論理学の基礎づけ(platonische Begründung der Logik)」として生じた，と述べている。

「われわれは単にゆるやかな意味で，プラトン以前の時代の哲学を学問と呼ぶにすぎない。……われわれはそれを，学問の前形態，前段階としてのみ認めるのである。新しい意味での学問は，プラトンによる論理学の基礎づけから初めて生じた。それは『真の（echt)』知，『真の』学問の本質要件を探究する場であった。」(XVII, 5)

二つのことが読み取られねばならない。

第一に，フッサールの言う「基礎づけ」とは，実は，理念的（イデア的）対象を扱う数学的・幾何学的学問の基礎づけのことにほかならない。ここで挙げられている「論理学(Logik)」とは，「純粋に理念的（rein ideal)」な学問のことであり，それは「今日のわれわれの言い方では論理学（Logik）ないしは学問論（Wissenschaftslehre)」と呼ばれるとフッサールは述べている（XVII, 6)。それは，理念的対象を扱う学問の総称なのである。『算術の哲学』における出発点をも考慮に入れれば，このような理念的学問の基礎づけこそが，フッサールの生涯にわたる探究を支配していた課題であったことは明らかである。フッサールの「基礎づけ」を，もっぱらデカルト的な作業と重ね合わせて理解しようとするならば，それは間違いである。

第二に，フッサールが論理学について語る際，歴史を意識している，ということである。見られるように，『論理学』の冒頭でフッサールが語り出しているのは，「『真の』学問」の最初の探究者であった「プラトンによる論理学の基礎づけ」なのである。そして，それに続けてガリレイやデカルトの営みに言及しているのを見れば，『論理学』におけるフッサールの思惟がすでに『危機』における歴史考察を先取りしているのは明らかである。

果たして晩年にフッサールは，理念的対象と歴史性との交差について顕在的に語り出す。最もそれが明確に現れているのは，周知のように草稿『幾何学の起源』(1936年，以下『起源』と略記）においてである。

「ここで問題が生じる。企図することと成功裡に実現させることとは，なんといっても考案者の主観の内においてのみ生じ，さらにまた，本源的に現存する意味もまた，その内容全体とともに，もっぱら考案者の精神的空間の中に存している。しかし幾何学的存在は心理的なものではない。すなわちそれは，個人的な意識領域の中にある個人的なものの存在ではなく，『万人』(現実的および可能的幾何学者ないしは幾何学を理解する者）にとって客観的に現存しているものの存在なのである。のみならず，幾何学的存在はそ

の創設からして，われわれが確信しているように，すべての人間……にとって入手可能な独自の超時間的な現存を有している。」(VI, 367f.)

先に見た，数学的・幾何学的認識に伴う謎めいた歴史性を，ここでわれわれは再確認することになる。「ピタゴラスの定理」はある時ピタゴラス個人の意識の中で生じた。だがそれは主観的なものではなく，すべての人に理解可能なものとして客観性を備えている。2000年以上後に生きているわれわれは，ピタゴラスが発見した事柄を純粋にそのまま各自の脳裏に再現することができる。常識的な意味での歴史から最も縁遠いものが実は最も正確に伝承され，それゆえ最も歴史的なものにほかならない，ということ。おそらくはフッサール自身においても潜在的に意識されてきたこの逆説的な事態が，『起源』において顕在的に洞察されるに至ったのである。

そしてフッサールはこの謎の解明に取りかかる。『起源』においてフッサールは，周知のように，伝承の媒体としての文字記号の役割を強調しており，それはさらにデリダの「エクリチュール」概念の機縁になっている[5)]。

『幾何学の起源』という魅惑的なテクストの内容は，ともすれば，もっぱら「エクリチュール」概念の起源として重視される傾向がある。レアルな事象への執着から引き離されてこそ存立する幾何学的理念性が，まさにレアルな事象にほかならない文字言語によってはじめて再現されるということ。この逆説的な事態に対する洞察は，もちろんデリダの「脱構築」の思惟につながっている。

だが，これにばかり囚われていると見逃されてしまう問題がある。

それは，幾何学的認識がいかにして最初の幾何学者の意識において生じることができたのか，という問題である。フッサールがそもそも問おうとしたことも，むしろこの問題ではなかっただろうか。なぜなら「幾何学の起源 (Ursprung)」がそもそもの問題だったのだから。

「われわれの関心は，……最も根源的な意味を遡行的に問うことにある。すなわち，幾何学がかつて生じ，爾来数千年の伝統として存在し，なおわれわれにとって存在し，引き続き研究されている，その根源的な意味を問うのである。幾何学が歴史上初めて登場した——登場せざるをえなかった——際の，その意味をわれわれは問題にする。」(VI, 366 強調引用者)

5) *L'origine de la géométrie, traduction et introduction par J. Derrida* (Presses universitaires de France, 1974)．田島節夫ほか訳『幾何学の起源，ジャック・デリダ序説』(青土社，1983年)。また，野家啓一『無根拠からの出発』(勁草書房，1993年)，三「フッサール現象学の臨界」を参照。

感性的な経験の世界において，われわれは幾何学的な意味での正確な直線に出会うことはない。では，最初の幾何学者は，いかにして，長さのみをもって幅をもたない直線の理念を得ることができたのであろうか。問題にされなければならないことは，幾何学的対象がある時ある人物の思考において生じたときの仕組みである。

『起源』の終盤部においてフッサールはこの問題を取り上げ，次のような説明を与えている。

「物の諸形態において目立つのは，まず面である。多かれ少なかれ『なめらかな』，多かれ少なかれ完全な面である。また，ふちも目立つ。多かれ少なかれ尖っており，あるいはそれなりに『均等な』ふちである。これは言い換えれば，多かれ少なかれ純粋な線であり角であり，また，多かれ少なかれ完全な点である。そしてその後，たとえば線の中では直線が，面の中では平面がとりわけ偏愛される。たとえば，実用的根拠から，平面と直線と点によって限界づけられている板が偏愛されるが，それに対して，全体として湾曲していたり，個々の部分が曲がっている面は，さまざまな実用的関心にとって望ましくない。このようにして，実地においてはつねに，平面の制作とその完全化（研磨）がその役割を果たしている。」（VI, 384）

このようにフッサールは，幾何学的概念の生成のプロセスを事実発生的に記述している。滑らかな面をどこまでも追求してゆくといった過程を経て，「平面」という幾何学的概念が生じるというわけである。

だが，これは説明になっているだろうか。このような過程によって生じるのは，真の意味での幾何学的対象だと言えるであろうか。実はこれは説明として適切ではない。フッサール自身が続けて述べているように「これではまだ，幾何学的空間を手に入れたことにはならないし，……幾何学的諸形態を手に入れたことにはならない」（ibid.）のである。なぜなら，このようにして生じたものは感性的な性質を大きく引きずっており，レアルな事象の執着から逃れた純粋な理念性を実現していないからである。デリダはこのレヴェルのイデア性を「感性的理念性」もしくは「感性的な形態論的理念性」と呼んでいる[6)]。

上の説明の不適切さをフッサール自身が自覚しているのであれば，彼が結局どのような説明を与えているのか，に注目しなければならない。だが，これに対する答えは意外かつ難解なものであり，われわれは議論の道筋をそらされているかのように感じる。だが，『起源』のテクストの中を探ってみる限り，次に挙げる箇所以外に答えに当たるものは見当たらないし，しかもその箇所は，段落全体がゲシュペルトで強調されている。

6） *Ibid.*, p.133f. 邦訳，201－202頁。

「いまや問題は，歴史の本質をなすもの（das Wesensmäßige der Hisorie）を頼りに，幾何学の生成全体に必然的に（notwendig）その持続的な真理としての意味を与えることのできた，また，与えるはずであった歴史的な起源の意味（historische Ursprungssinn）を発見する，ということであろう。」（VI, 385）

難解な箇所である。これは何を言おうとしているのだろうか。

これに続く叙述の内容をも踏まえて言おう。フッサールは，幾何学的理念性の発生を歴史的に必然の出来事と考えているのである。感性的経験から幾何学の理念的対象が生じることは，原理的にはありえない。既に述べてきたように，幾何学が扱う対象は，経験的な不純さから逃れてこそ存立するからである。感性的経験を通して得られる諸形態と幾何学の対象との間には，飛び越えることのできない深淵がある。だが，実際にはこの間で，原理的には不可能なはずの飛躍が実現している。それをフッサールは「歴史の必然」として説明しようとするのである。それゆえフッサールは，『起源』の末尾で「歴史性全体を貫く目的論的理性」（VI,386）について，「理性の目的論」（ibid.）について語り出す。人間の理性は，幾何学の純粋な理念性に行き着くように予め目的論的に定まっている，というわけである。そして，それを可能にする歴史の必然的行程，「普遍的な歴史的アプリオリ」（ibid.）を語り出すのである。

《目的論》は，晩期のフッサールにおいて決定的な役割を果たしている枢要な概念である。上に辿ったように，理念的学問の基礎づけという生涯の課題を果たすために，フッサールは最後に歴史の目的論的運動に依拠しようとしたと見ることも可能なのである。

さらに，私が見るところ，《目的論》がフッサールの思惟を構造化していた領域は，これまで見たところにとどまらない。『危機・補遺巻』の第４部に収められた草稿（1937年）の内容を見ると，《目的論》が現象学的思惟の実践に関わる根本的概念であったことが分かる。《目的論》は，現象学することそのものを可能にするものであることがそこで語られているからである。

このような見通しを持った上で，フッサールの言う目的論とはどのようなものかを，次に見てみることにしよう。

3. 晩期フッサールにおける《目的論》

フッサールは様々な事象について「目的論」を語っており，フッサールがこの概念の着想を得た経緯も明らかではない。だがそれにもかかわらず，この概念が関わってくる最重要のテーマははっきりしている。すでに見たように，それは哲学史の問題である。

デカルトに始まる近代哲学の歴史を，「超越論的哲学（Transzendentalphilosophie）」という目的点に至る運動とフッサールが見なしていたことは，すでに述べた。フッサールによれば，「超越論的（transzendental）」とはある動機を表す言葉，すなわち「あらゆる認識形成の究極的源泉に遡って問おうとする動機」，「認識者が自分自身ならびに自分の認識する生に対して自己省察を加えようとする動機」（VI,100）を表す言葉である。このような探究姿勢においては，いかなる事象もそれを構成する自我との関係において捉えられることになる（Vgl. VI, 101）。真の意味での「超越論的哲学」は，カントを越えて自らの超越論的現象学に到達したとき初めて実現されるという。

このことを踏まえた上で『危機・補遺巻』における歴史考察に目を転じてみよう。そこに見られる歴史考察の内容は，まさにこれまで見てきたところに符合して，哲学史の目的論的構造を論じる記述によってほとんど埋めつくされている（第四部）。哲学がその原創設（Urstiftung）以来必然的に目的点（Telos）を目指していること，したがって，哲学の歴史は自ずと目的論的な運動としてしかありえないこと。このことをフッサールは倦むことなく繰り返し主張している。ここでは，テロスとして到達される哲学を意味するものとして「唯一の哲学（die Philosophie）」という言葉が何度も登場する。これが自らの超越論的現象学を指していることは，あらためて指摘するまでもないであろう。

ところで，『危機・補遺巻』の歴史考察の中で頻出する言葉がもう一つある。それは「自明性（Selbstverständlichkeit）」という言葉である。本書のとりわけ終盤部分において，フッサールの叙述はこの言葉の周囲をぐるぐると巡っており，捉えかけたと思うや逃げて行ってしまう事柄を虚しく追いかけているような印象を与える。ここでは何が問題になっているのだろうか。

ここでの問題は，哲学が現実には「自明性」を前提し，そこからしか始まることができない，という点にある。哲学は本来いかなることも自明視せずに疑問に付し，無前提の立場で考えようとする思惟の活動のはずである。ところが実際にはそれは，無批判にあらゆるものを受け入れながら営まれる日常生活から出発する以外にない。このことは，フッサールにとってはパラドックス以外の何ものでもなかった。

> 「哲学者は，通常のあらゆる生活実践が営まれる，生活の日常世界（Alltagswelt des Lebens）を真の世界として通用させることはない。この日常世界を，哲学者もそのつどそのつどの状況においては，内在する問題をもたない確実性として目の当たりにしているのであるが，それを真の世界として通用させることはないのである。だが，哲学者が提示する真理問題，哲学者が企図する理論や体系は，このような日常世界を前提している。また，哲学する人間をも，この日常世界に属するものとして前提している。あらゆ

るものが，そしてこの前提されている世界が，主観的な触発の中で与えられているということは，……あらゆる理論に先行する真理であり，よく見れば，この理論の中ですらも前提されている真理である。」(XXIX, 412)

フッサールはこのことを論じながら，エポケーの端緒（Anfang）の問題に言及する（Vgl. XXIX, 413)。ここで示された問題は，現象学的還元をいかにして正しく開始することができるのか，という現象学の根本問題に関わっている。上で見た困難を現象学還元の遂行に関わる困難として捉え直すとき，問題はより見やすくなるであろう。

現象学的還元の遂行につきまとうパラドックスは，還元の理論を構築し始めた当初からフッサールを悩ましていたものであった。還元とは自然的態度からまったく離れ去ることであり，開示されるべき超越論的次元は，自然的態度の中にあっては見通すことのできない次元である。したがって，自然的態度を脱してこの次元に移行することは，その初めにおいていかにして可能か，という問題が生じることになる。というのは，自然的態度の中にある人間は，自分がその中で生きているということにすら気づいておらず，したがって，自己の素朴な認識態度を自覚して還元を開始するためには，すでにそれ以前に何らかある程度の還元を行っていなければならないからである。つまり，還元の遂行は自己前提的・循環的な誤りを避けることができないのである。自然的態度に没入していながら，それと同時に自然的態度を越え出ていなければならないということが，現象学還元の遂行にまつわるパラドックスである[7)]。

たしかに，いかなる思惟も自明な日常世界から出発する以外にない。それゆえ，無前提性の境地を目指す哲学的思惟も，実際には生活世界の「自明性」を前提することは避けられない。『危機・補遺巻』でフッサールがこだわり続けているこのパラドックスを，われわれは幾分か修正しながら捉え直す必要があろう。このパラドックスは，より正確には次のことを意味している。すなわち，われわれは「自明性」に満ちた日常世界に没入して生きていながら，実際にはすでにこの「自明性」を越え出ている，というパラドックスである。そのため「自明性」は実のところは「自明性」ではない。そもそも「自明性」とは，自覚されないがゆえに「自明性」なのであって，反省的に主題化されたときにはすでに「自明性」ではない。「自明性」は，捉えたと思うや否やすぐさま手からすり抜けて行ってしまう。それゆえ『危機・補遺巻』の終盤部分において，フッサールはこの「自明性」の捉えがたさに難渋し，「自明性」に対する問いを発し続けながら，その周囲を回って思考を空転させているのである。

7) 現象学的還元の遂行にまつわるパラドックスを明らかにしたのは，フッサール自身よりもむしろ弟子のE・フィンクである。本稿の叙述も，以下で示されたフィンクの主張に基づいている。
Fink, E., "Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik", in: *Studien zur Phänomenologie 1930–1939*, Phaenomenologica 21 (Martinus Nijhoff, 1966).
Id., *VI. Cartesianische Meditationen*, Teil 1, Husserl-Dokumente II/1 (Kluwer, 1988).

このようにフッサールの歴史考察は，いかにして現象学を始めるかという根本的問題に関わっている。そしてこのことは同時に，人間がいかにして哲学を始めることができるのかを問うことであり，それは必然的に再度われわれを歴史考察へと導く。すなわち，人類において初めて哲学が行われた現場へと歴史的に遡ることが要請されるのである。タレスにおける哲学の開始というよく取り上げられる場面に，フッサールもまた遡ろうとしている（Vgl. XXIX, 389）。

タレスの「驚き（thaumazein）」によって哲学が始まったとよく言われる。ただ，ここではそのこと自体が問題なのではない。問題は，なぜ驚くことができたのか，ということである。日常生活の「自明性」の中に浸りきった状態にあって，なぜタレスはそれから距離をとって驚くことができたのか。この疑問に導かれて，フッサールの考察は哲学の原創設（Urstiftung）の場面に赴く。

そして，この原創設における飛躍を説明するのが，ほかならぬ《目的論》なのである。

> 「……哲学史の目的論が明らかになる。〔哲学史の〕現実の運動と現実の諸哲学の連鎖が，素朴性（Naivität）の中にあってエポケーへと動機づけられていること，新たな根本的省察による転換へと動機づけられていることが明らかになるのである。この新たな省察とは，原創設において芽生え，次第に明らかになりながら『終局』形態（“Ende”-Gestalt）に到達してそのテロスを明らかにする理念が発現することにほかならない。」（XXIX, 418 強調引用者）

到達されるはずのテロスがあらかじめ定まっており，そこへ向かわせる駆動力が哲学の原創設の場面で働いた，とフッサールは考えるのである。テロスの存在こそが自明性を越え出る飛躍を可能にし，エポケーの開始を必然のものにする，というわけである。晩年に唱えられた歴史の目的論的構造は，現象学の実践にまつわる困難を回避するためにフッサールが認めざるをえなかったぎりぎりの先所与的事実であったと言えよう。

4. 「歴史的な道」——現象学的還元の最終的形態

《目的論》がフッサール現象学の中核部分に関わる根本的概念であった次第が明らかになってきたであろう。見られたように，それは，自然的態度からの脱出を説明し，現象学的還元の開始を正当化するために要請されたのである。現象学において招聘された《目的論》は，現象学そのものの実践に関わっていたのである。

『危機・補遺巻』に収められた草稿では，このような目的論的構造に基づいた還元の遂行が，

『イデーンⅠ』における還元の道に取って代わるものであることが明言されている。

「哲学の課題を完全に満たす哲学へ至る，非歴史的な道。そこでも歴史的なものは働いているが隠れている。これは私自身が辿った最初の道である。それゆえそれは，すぐさま私の『イデーン』の部分において（あらゆる歴史的な問いを抜きにして），自我への『現象学的還元』という開始型をとって始められた。……いま書いているこの草稿では，私が思うに，あらゆることを含めてよりよい道，教えるところのより多い道，を選んだ。すなわち，近代の歴史に備わる内的目的論を方法的に示す道を選んだ。この道は，近代の哲学の内的歴史性を説明することによって始まる。すなわち，近代においてデカルト的理念が繁殖してゆくなかで見られた，第一の字義的な意味での目的論を説明することによって始まる。」（XXIX, 399）

このことを初めとして，最晩年のフッサールは，とりわけ『イデーンⅠ』で示された諸々の現象学的概念を，歴史の先所与性の観点から大幅に改定しようとする意図さえ持っていた。これもまた『危機・補遺巻』の最終部分にはっきり現れている。「34番」という番号が付された草稿である（XXIX, 424–426）。書かれたのは1937年夏で，まさに最晩年であった。

わずか3頁の草稿だが，そこには決定的な論点がいくつか含まれている。特に重要だと思われるのは，「自然的態度の世界」と「生活世界」とが，どちらも同じ内容を表わしていることが断言されていることである。両者の異同は，長らく現象学研究者たちを悩ましてきた問題の一つであった[8)]。この草稿のなかでフッサール自身が，両者が同じ事柄を指示していること，ただ，現象学の用語として「生活世界」のほうが適切であること，そして，そこには現象学的還元の遂行の問題が関わっていることを明らかにしている。

「超越論的現象学的哲学へ導き入れるさまざまな道を私は考案した。『イデーン』では，いわば一気に現象学的還元を導入し，現象学的哲学の新たな作業領域へ読者を置き変えることができると私は考えた。……『イデーン』では，道の出発点は『自然的世界概念』であった。それは『自然的態度』の世界という『概念』であるが，それを私はいまもっと適切な言い方で呼ぼう。それは，前学問的・学問外的な生活世界である。別の言い方をすれば，われわれのあらゆる自然的・実践的な関心生活のなかで，われわれの関心，目標，行為の恒常的な領野となっている世界である。……このような世界，すなわち，われわれにとって日常的で自明となっており，古くから馴染まれている世界……につい

8) Cf. Ingarden, R., “What is new in Husserl’s ‘Crisis’”, in: *Analecta Husserliana*, Vol. II (Reidel, 1972).

ては，『イデーン』では大ざっぱな特徴が描かれたにすぎなかった。もっとも，このヘラクレイトス的な運動の世界を体系的に分析し記述することが，重大で難しい問題であることは，はっきり強調されたのではあるが。」(XXIX, 425f. 強調引用者)

確認されるべき点がいくつかある。まず第一に，フッサールにとって「生活世界」は，現象学的還元が開始される場を意味していたということである。ともすれば「生活世界」は，近代科学の数学的・幾何学的な作業との対比において理解されがちであるが，超越論的現象学の営みの手順において確固とした位置を持っているのである。すなわち，そこから還元が開始される以外にない自明性の領域である。

したがって，第二に確認されなければならないのは，この自明性を表わすのに，「自然的態度の世界」という言い方よりも「生活世界」という表現のほうがより適切だとフッサールは考えたという点である。「生活世界（Lebenswelt)」という言い方のほうが，われわれが普段生きている日常性やその中に含まれている多様性を表わすのにより適しているということであろう。

第三に挙げなければならないのは，生活世界が備えている多様性を表現するには，それが多彩な変化や運動を含んでいることに言及する必要がある，とフッサールが考えていた点である。そのためフッサールは，「ヘラクレイトス的な運動の世界（Heraklitisch-bewegliche Welt)」という言い方を選んでいるのである。そして，この変化や運動を構成する要素として〈歴史性〉が取り上げられる。それは上に続く箇所においてである。

「この（全時間的に受け取られた）生活世界が歴史的な世界にほかならないということを，われわれは見ることになるであろう。そこから次のことが感じ取られるだろう。すなわち，現象学へ導き入れる完全に体系的な導入は，普遍的な歴史的問題として始まり，そのようなものとして遂行されるということである。歴史的な主題系を抜きにエポケーを導入すれば，生活世界あるいは普遍的歴史の問題が残ってしまう。『イデーン』における導入はたしかに正しいものではあったが，いま私は，歴史的な道のほうがより原理的でより体系的だと考えている。」(XXIX, 426)

見られるように，「生活世界」は「歴史的世界」をも意味している。その中にあって，歴史の目的論的構造のなかに身を置くことによって，エポケーを正しく開始することができるのである。上に見られるように，それは「歴史的な道（geschichtlicher Weg)」と呼ばれており，『イデーン』における道よりも原理的で体系的な道だと言われている。現象学的還元の道としては，「デカルト的道」，「心理学者の道」等がよく知られているが，それらに加えて

この「歴史的な道」があることをわれわれは知ったことになる。

5. 解釈学への転換

フッサールにとって〈歴史〉が最重要の問題系に属していた次第は，すでに明らかであろう。それは，フッサールの考察が及ぶ単なる一テーマではなく，現象学の実践そのものに関わる課題を意味していたのである。

現象学的還元の遂行の道として「歴史的な道」が存在していたことの意味はきわめて大きい，と言わなければならない。還元の開始をめぐるパラドックスの観点から見れば，これをもって現象学的還元の最終的な形態と見ることも可能だからである。フッサールはこの最終的な道を，最晩年になってようやく明らかにしたと見ることができる。

そして，この道は，超越論的現象学の構想の根本的な修正を迫るものにほかならない。というのは，この道を採用することは，あらかじめ存在する歴史の目的論的構造によって諸学問を基礎づけることを意味しているからである。それは，すべてを超越論的主観性の構成能作に帰着させようとする現象学の目論見と明確な対照をなす。見られたように，最晩年のフッサールは，歴史によって現象学そのものを基礎づけ，さらには，幾何学をはじめとする諸学をも基礎づけようとする意図を持ち始めていた。推測するに，晩期のフッサールは，諸学の基礎づけの課題を歴史に預けたいという誘惑に駆られていったのである。

だが，この道を進めば，現象学の諸概念の全面的な改定に向かわなければならなかったはずである。それまでに構築した現象学の構成を根底から作り変えることに，フッサールが躊躇しなかったわけはない。晩期のフッサールの思索は，一方で歴史に依拠したいという欲求に突き動かされながら，他方でそれをためらうという両義性によって彩られているのではないだろうか。

ただ，われわれがフッサールと同様の感じ方をする必要はない。われわれに課されているのは，ここで見届けられた事柄をどのように引き受けるかを決定することである。

フッサールが躊躇したのとは逆に，歴史の先所与性をむしろ積極的に認めようとする考え方がある。周知のように「解釈学的」と呼ばれる思惟の形態である。「解釈学」という言葉は今日さまざまな論者によってさまざまな意味で用いられているが，基本的には，はじめから歴史に取り込まれた有限なあり方を，人間の根本的な存在様態として認めようとする考え方である。

はじめから否応なく歴史のなかに置かれていることを認めようとすれば，歴史的に与えられる雑多な連関を引き受けざるをえない。解釈学的な思惟を採用することは，このような見通しのきかない混沌の状態のなかに敢えて身を置くことを意味する。だが，解釈学的と呼ば

れる考え方は，このことを知の構築のための不利な条件とは見なさない。解釈学では，先入見の役割を積極的に評価するからである。

人間の知の営みは，現実には，歴史的な経緯によってすでに流布している知識から出発せざるをえない。それはもちろん不完全であろうし，誤っていることも多いであろう。だが，それは知を構築するための不可避の出発点であり，その意味で有効な役割を果たしていると言わなければならない。その役割の重要さからすれば，それは「先入見」というよりも「先行判断」と呼ばれるのが至当である。ここから出発し，それに修正を加え，ときにはそれを全面的に否定するような作業（追判断）を行うことによって，われわれは理解を形成してゆくのである。

晩期のフッサールにおける〈歴史〉概念を検討することによって，われわれは，このような解釈学的な思惟への転換を促された，と考える。哲学的思惟の開始を可能にしている条件を求め，その結果，歴史の先所与性に行き着いたということは，まさに解釈学的な洞見にほかならない。現象学的還元という操作は所与の事実を判断の外に置こうとするものであり，当然のことながら歴史的事象も遮断されるべき事柄に含まれる。ところが，この歴史遮断的な操作を突き詰めた結果，〈歴史〉は，むしろその拘束力をますます顕わにする仕方で，自らの存在を示すのである。このようにして見出される〈歴史〉とは，まさに解釈学において主張される先所与的な事実性の領域と合致するものにほかならない。

フッサールの至り着いた思惟の境地を解釈学的なものとして引き受けようとする見方は，すでにさまざまな論者によって提示されており[9]，その点では本稿は新しいものを付け加えるものではない。ただ，フッサール自身の思考が，これまで考えられていたよりもさらに解釈学に接近していたことを確認することが本稿の眼目であった。

さて，「解釈学への転換」というわれわれの立場を確認した上で，今後果たすべき課題について瞥見しておくことにしたい。

第一に，歴史の運動を目的論的に捉えようとする見方は果たして正しいのかという問題が，まず出てくるであろう。フッサールがそもそもどのような事象において《目的論》の構造を見出したのか，その経緯は必ずしも明らかではない。ただ，フッサールは事物の知覚に関して頻繁に《目的論》を語っており，諸論者が指摘しているように[10]，フッサールが《目的論》について述べる際に何よりも念頭にあったのは知覚の目的論的構造であろう。

9）私の念頭にあるのは，主として次の論者と著書である。
新田義弘『現代哲学—現象学と解釈学』（白菁社，1997年）
野家啓一『無根拠からの出発』（勁草書房，1993年）

10）新田，前掲書，第10章「フッサールの目的論」，304頁。
Vasquez, G.H., *Intentionalität als Verantwortung, Geschichtsteleologie und Teleologie der Intentionalität bei Husserl* (Phaenoenologica 67, 1976), S. 201.

事物を知覚する際，われわれが感覚によって受け取っているのは雑多な感覚与件にすぎない。にもかかわらず，それらを通覧しながらわれわれの意識は事物そのものに到達する。われわれの意識は到達点としての事物を先取りし，さまざまな感覚与件をそれに帰属させる仕方で統一的な知覚を行っているのである。このように，意識から独立して存在する事物に意識が関わることを意味するのが「志向性」という概念であったことを思い起こさねばならない。

さて，この知覚の目的論との類比において，フッサールは歴史の目的論を考えていた。このこともまた，『危機・補遺巻』によって確かめられることである（Vgl. XXIX, 419）。だが，知覚の構造を歴史にも当てはめ，歴史のなかに目的論を読み込むのが適切かどうかは，別途に考察されなければならないことであろう。『危機』の本論で示されたフッサールの歴史観（哲学史観）は，自らの超越論的現象学の立場を終着点として設定し，その上で歴史（哲学史）の道筋を必然的なものとして構成している。これはやはり恣意的にすぎるとの批判を免れるのは難しいであろう。

この点でフッサールを批判する場合，ではどのような歴史叙述ならば正しいのかという問題が生じることになろう。ここでは歴史認識一般に関わる問題が，さらに考察されるべきものとして残ると言えよう。

第二に，もう一つ残る問題として，幾何学的概念と目的論との関わりを挙げておかねばならない。晩期のフッサールが，理念的学問の発生を目的論的に説明しようとしていたことを示すことが，本稿の眼目の一つであった。だが，このような説明が正しいかどうかという問題は，もちろん簡単に答えが出るようなものではない。

机や壁のなめらかな表面を無数に経験し，そこで「面」に関する感性的概念が得られ，さらにそこから「平面」という理念的な幾何学的概念への飛躍が遂げられるとする見方には，知覚を出発点として学問的理念の成立を説明しようとする現象学に固有の探究姿勢が現れていると言えよう。ただ，このようにして得られた幾何学的概念はどのような存在身分をもつのであろうか。フッサールの考えでは，「点」「直線」「面」のような幾何学的対象はそれ自体として存在するのであろうか。それともそれは意識によって構成されたものなのであろうか。

このような問題に対する解答を与えようとする立場としては，今日，「論理主義」，「直観主義」，「形式主義」の三つが代表的なものとして挙げられる。この三つは，1930年秋，ケーニヒスベルクで開かれた「精密科学の認識に関する第2回会議」において示されたものである。この会議では，それぞれの立場の代表者として，カルナップ，ハイティング，フォン・ノイマンの3人が基調講演を行っている[11)]。

11） 佐々木力『二十世紀数学思想』（岩波書店，2001年），第1章「数学基礎論論争」を参照。

この三つの立場を基準としたとき，フッサールの「目的論」の立場はどれに当てはまるのであろうか。それとも，どこかの間に位置するのであろうか。あるいはまた，まったく新しい立場を表わしているのだろうか。

また，さらにフレーゲとの論争，ヒルベルトとの係わり，ワイルとの交わり，ゲーデルに与えた影響等々といった出来事を考え合わせれば，数学に関して現象学的思惟がどのような位置づけを持つかというテーマが，探求を誘う意味深い課題領域として浮かび上がってくるであろう。ただ，このテーマも本稿では扱う余裕がない。これもまた残された問題である。

5. 結　　語

晩期フッサールにおける歴史の問題を検討することによって，われわれは解釈学への転換を強く促されたことになる。この転換はすでに一定の論者のあいだで共有されているものであるが，この見方がさらに強化されなければならないことをわれわれは見たのである。晩期のフッサールの思惟が，これまで考えられていた以上に解釈学に接近していたことが明らかとなったからである。現象学の営みのなかに解釈学への転換が必然的に含まれているということは，やはり瞠目に値するであろう。

上で見た残された問題をはじめとして，さまざまな問題について解釈学的な立場から解明を行うことが，われわれが今後果たしていかなければならない課題である。この課題領域のなかには，もちろん無数の案件が含まれる。具体的な問題の提示と解明は，今後の作業に譲らざるをえない。本稿では，解釈学的な探究姿勢への転換の必然性を示すことで満足することにしたい。